

市民のリスク認知とリスクリテラシー

田中 豊(大阪学院大学)

1. リスク認知とそのバイアス

リスク認知とは、人間に特有なリスク推定の認知プロセスやその推定結果のこと→**リスクの主観的・直感的認知のこと**

市民の感じる「危険性」は、科学的・客観的な「危険性」と一致するのだろうか？

例. 放射線の危険性、遺伝子組換え食品の危険性



両者はしばしば大きく異なっている

専門家の判断

- 科学的・客観的な指標をもとに判断

- 例
- 年間死亡率
 - 平均余命
 - 統計的確率
 - 工学的指標



市民の判断

- より直感的な判断

- 例
- 特定の出来事の新しさや鮮明さ
 - 事故時のカタストロフィーの程度
 - 制御性
 - 被害の遅延性
 - 知覚可能か
 - 自然か人工か



リスク認知のバイアス



危険

4(6)危険性がゼロでない限り、その科学技術を利用したり、社会に受け入れるべきではない

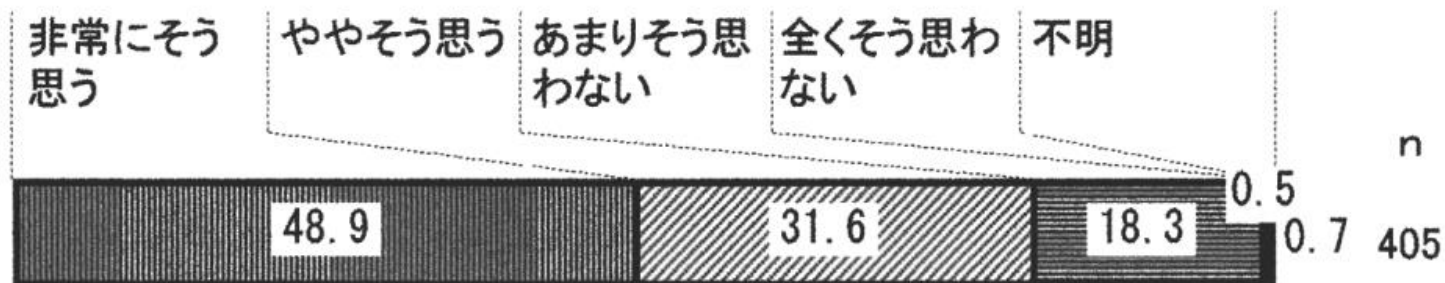


図1 基本思考の修得度(ゼロリスクでない科学技術の受容)(田中, 2009)

4(12)例えば事故の確率が非常に低くても、一度に大勢が死亡する科学技術は受け入れられない

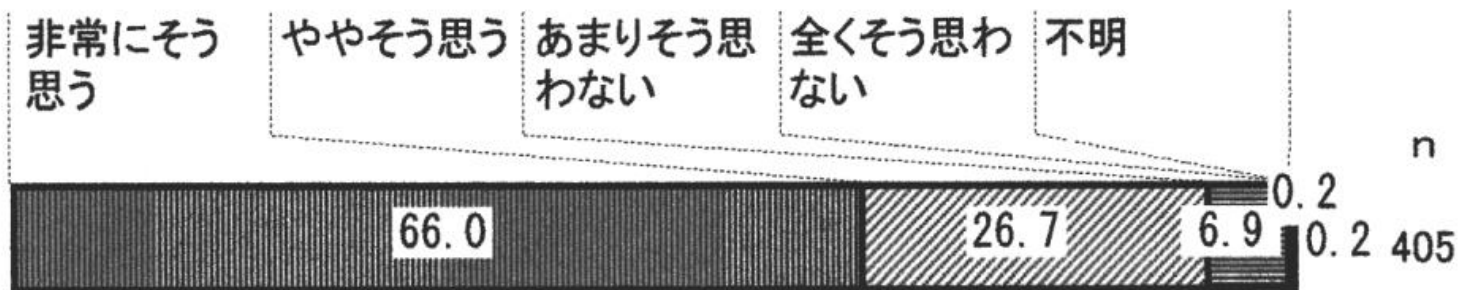


図2 基本思考の修得度(事故時の被害が大きな科学技術の受容)(田中, 2009)

放射線・GMO・食品添加物などに対する市民の認知

1

・ 健康被害が生じるのでは？

2

・ 個人ではコントロール出来ない

3

・ 多数の人々に甚大な悪影響を与えるのでは？

4

・ 五感で知覚できない



リスクが過大に見積もられる(認知される)傾向がある

遺伝子組換え食品に対する市民の態度

市民は、遺伝子組換え食品(GMO)に対し、否定的な態度を取っている



しかし市民は日常生活での食品購入において、遺伝子組換え食品であるかどうかを常に気に掛けているわけではない



遺伝子組換え食品に対する否定的な態度が、そのまま食品の購買行動に結びついていないわけではない

全体集計結果概要(田中, 2009)

	品種改良農作物	GMO
リスク認知	低い	高い
ベネフィット認知	高い	やや低い
関係者への信頼	ある程度信頼	どちらともいえない
生命倫理	意見が分かれる	強い抵抗感
個人的受容	受容されている	受容されていない
社会的受容	受容されている	受容されていない

市民のリスク認知バイアスが大きくなりがちな理由

人間のリスク認知の特性

- 人間は生来的に、科学技術や放射線などのリスクを判断する際に、様々なバイアス(偏り、歪み)がかかり易い



リスクリテラシーの不足

- 科学技術や放射線の基礎知識が不足している
- リスクに対する基本的な考え方が身に付いていない



一般的には、専門家は一般の人々より妥当な判断を下している



しかし専門家もその判断にバイアスがかかることがある



双方が自分の判断基準こそ正しいと主張し、相手を理解できないと感じている間は、両者の間に噛み合った建設的な議論はできず、信頼も生まれない



「どちらの側も、他方から学ぶものがある。これらは、尊重される必要のある、そしてリスク管理上の決定に適切に統合される必要のある価値の問題である」(Slovic, 1994)



2. 科学技術の受容を規定する心理的要因

認知的要因

リスク認知

ベネフィット
認知

感情的要因

好き/嫌い

不安

恐れ

怒り

認知＋感情的 要因

信頼

生命倫理観

3. リスクリテラシーとは

科学技術のリスクやベネフィット、あるいは受容の判断を適切に行う上で基本的に必要な思考方法を獲得している程度のこと

- 例.
- (1)市民のリスク認知バイアスの存在
 - (2)リスクとベネフィットのトレードオフ思考
 - (3)リスクとリスクのトレードオフ思考
 - (4)ゼロリスク達成は不可能であること
 - (5)リスク認知のパラドックスの存在
 - (6)メディア報道のバイアスの存在、など



リスクリテラシーの高い人は、様々な科学技術のリスクや受容の判断を、適切に行える基本的能力を備えているといえる

4. おわりに

市民のリスクリテラシーは全体的に低い



学校教育をはじめとする生涯の全ての段階におけるリスク教育が必要



不安を感じないのではなく、不安を感じても一旦立ち止まり、リスクやベネフィットについて冷静に考えて行動できる市民となることが大切